

硯すずりを作る知人がいる。

れ、きとした、由緒正しい職人さんだ。

昔からの製法で、岩を堀り、砕き、削り、磨き、仕上げる。

硯は墨をするための道具だが、今の小学生は、墨はすらない。プラスチックの硯型用品に、墨汁を注ぎ、書道の一手間を省く。

文字を書くための、手間を省く。

書くために省かれてきたものは、硯だけではない。筆も、墨も、紙も変わ、た。その変

化は、夕分、進歩、進化と呼んで差し支えな

いものなのだろうが、いつの間にか、「書く

ことは、「記す」ことは、「文字を綴る」こ

とは、手書きという手順さえ超えてしま、た。

キーボードを叩けば、誰にでも、早く、速く、同じ形の文字が書ける。

便利になることを、無闇と忌避するつもり

はない。それは、便利な物事に慣れ過ぎるのと同じくらい、怖いことなのだと思う。

伝統的な職人の世界でも、変化を否定はし

ない。昔にはなか、た機械が工夫され、素材も、時代と共に新しいものが登場する。妥協や、利便性の追求とは違う。それは、きつと変わらぬ伝統を、変えないための変化なのだ。繰り返し、繰り返し、削る。彫る。そこに、省ける動作はない。積み重ねだけが、生み出す形がある。

省けるものを、省くのは良いことだ。

だが、省いてはいけないものを、見過ごしてはいないだろうか。

そんな不安と、しかり向き合うために、時には、硯で墨をすり、基本の「永」の一文字でも書いて、初心に戻りてみようと思いつく。私は、その職人さんの作った硯りをも、たいなくて、未だに使えずにいる。